

金史良の日本語文学が生成された批評空間 —— 植民地出身作家の交流の場としての『文芸首都』

高橋 梓

1 はじめに—「日本語作家」金史良

朝鮮人作家・金史良(1914–1950? 1年)は、平壤高等普通学校の「同盟休校事件」の主謀者の一人とされ、論旨退学処分になり渡日する。この渡日直前の時期から、旧制佐賀高等学校在学中にかけて、金史良は朝鮮の新聞・雑誌に童話や詩を発表する一方で²、日本語による創作を始めた³。その後、1936年に東京帝国大学文学部ドイツ文学科に入学して以降は、ドイツ文学科の学生と共に同人誌『堤防』⁴を刊行し、日本語による創作を続けていく。

金史良が本格的に日本の雑誌に作品を発表し始めるのは、1939年春に『文芸首都』主宰の保高德蔵を訪ね、同誌の同人になって以降である。『文芸首都』に発表した小説「光の中に」(1939年10月)が、第10回(1939年下半期)芥川賞候補作として『文芸春秋』(1940年3月)に転載されたことで、金史良は日本文壇において注目を浴びる⁵。芥川賞を受賞した作家の作品集を多く刊行していた小山書店から第一作品集『光の中に』(1940年12月)が出版されたこと⁶や、芥川賞の候補作品の選出にあたり「推薦カード」の回答を求められたこと⁷などは、無名の朝鮮人作家が『文芸春秋』に芥川賞候補作の作家として登場したことを境に、日本文壇において新人作家として迎え入れられたことをあらわしている。

金史良が「日本語作家」として日本文壇で受け入れられたのは、日中戦争が勃発し、アジア・太平洋戦争へと展開していく時期に、日本におけるアジアへの関心が高まったという背景があった。当時、日本文壇では朝鮮の文化や朝鮮文学が多く紹介された「朝鮮ブーム」というべき現象が起きていた⁸。菊池寛の援助を受けて文芸春秋社から独立した馬海松のモダン日本社は、1939年10月と1940年8月に『モダン日本朝鮮版』を刊行した。同社は1939年10月に「朝鮮芸術賞」を設定し、第1回「朝鮮芸術賞」文学部門は李光洙の「無明」に与えられた。1940年には、モダン日本社から李光洙の作品集(『嘉實』『有情』『愛』)が相次いで出版されると共に、朝鮮文学の作品集(申建編訳『朝鮮小説代表作集』教材社、張赫宙・兪鎮午・秋田雨雀・村山知義編『朝鮮文学選集』全3巻、赤塚書房)、金史良第一作品集『光の中に』(小山書店)、金素雲編訳『朝鮮詩集 乳色の雲』(河出書房)なども出版された。また『文芸』では「朝鮮文学通信」の連載が始まり、1940年7月には「朝鮮文学特輯」⁹が組まれた。

このような日本文壇における朝鮮文学作品の紹介は、朝鮮人による翻訳を通じて行われた¹⁰ため、これまで「朝鮮ブーム」は日本文学へ朝鮮文学が一方向的に包摂されたものとして理解されてきた。近年の研究にもとづけば、これらの動向は、日中戦争が勃発しアジア・太平洋戦争へと展開していく時期において、日本文壇で「国民」

1 以下、金史良(本名:金時昌)をめぐる年譜については、安宇植『評伝 金史良』(草風館、1983年)に収録された「金史良年譜」を参照する。また、解放後から朝鮮戦争中の1950年に従軍記者として消息を絶つまでの金史良をめぐる年譜は、布袋敏博「解放後の金史良覚書」(『青丘学術論集』第19集、2001年12月)の「延安への脱出～解放後の金史良年譜」に詳しい。

2 白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」『朝鮮学報』第147号、1993年(白川豊「植民地朝鮮の作家と日本」再録、大学教育出版、1995年)を参照。白川の調査によって、金史良が渡日直前に21篇、佐賀高等学校在学時に9篇の作品を朝鮮語で発表していたことが明らかになった。

3 金史良は旧制佐賀高等学校の文芸部に所属し、日本語で詩や小説を書いていた。この時期の発表作品については、白川豊、前掲論文、146–147頁を参照。

4 『堤防』は1936年6月に創刊され、翌年6月の第5号で終刊した(任展慧「解題」『金史良全集I』河出書房新社、1973年、378頁)。金史良は『堤防』に随筆「雑音」(第1号、1936年6月)、小説「土城廊」(第2号、1936年10月)、詩「奪はれの詩」(第4号、1937年3月)を発表した。

5 郭炯徳「金史良の日本文壇デビューから「米新亭時代」まで」『韓国近代文学研究』:韓国(韓国語)、第17号、2008年4月、200頁。郭は、同時代の芥川賞候補作が受賞作と共に掲載されたのは、1950年以前は第10回と第12回の2回しかなかったことに注目し、「光の中に」の『文芸春秋』への転載が異例なことであったとする。

6 小山久二郎『ひとつの時代—小山書店私史』六興出版、1982年、76–79頁。

7

郭、前掲論文、203頁。芥川賞候補作品の選出にあたり、日本文学振興会は文芸関係者各方面に「推薦カード」を送った。この「推薦カード」に回答した作家のリストは、『文芸春秋』の「芥川賞選考経緯」に掲載された。金史良の名前は、1941年3月号と1941年9月号に掲載された作家のリストの中に確認することができる。

8

「朝鮮ブーム」については、任展慧「植民地政策と文学」(『法政評論』復刊第1号、1970年12月)、任展慧「朝鮮側から見た日本文壇の「朝鮮ブーム」1939～1940」(『海峡』第12号、1984年3月)を参照。

9

「朝鮮文学特輯」において掲載された小説は、張赫宙「慾心疑心」、俞鎮午「夏」、李孝石「ほのかな光」、金史良「草深し」。評論は、林勇雄「朝鮮の精神」、林和「朝鮮文学の環境」、白鉄「朝鮮の作家と批評家」、李石薫「朝鮮文学通信」が掲載された。

10

上述した『モダン日本 朝鮮版』『朝鮮小説代表作集』『朝鮮文学選集』に収められた作品は、作者自身か、朝鮮知識人による翻訳が行われていた。また、金史良が「ある雑誌社の朝鮮文学の翻訳紹介に参画して」(金史良「朝鮮文学側面観」『朝鮮日報』:朝鮮(朝鮮語)、1939年10月4日)と述べていることから、金史良は『モダン日本 朝鮮版』(1939年10月)の編集に関わっていたと考えられる。

11

「国民文学」をめぐる問題枠組みについては、三原芳秋「『国民文学』の問題」(『Juncture 超域的日本文化研究』第2号、2011年3月)、尹大石「植民地国民文学論」(亦楽:韓国(韓国語)、2006年)、高橋梓「『反復』と『差異』—1940年代前半期における植民地の『国民文学』尹大石『植民地国民文学論』を読む」(『Quadrante』第15号、2013年3月)などを参照。

12

米谷匡史「日中戦争期の文化抗争—「帝国」のメディアと文化工作のネットワーク」山口俊雄編『日本近代文学と戦争—「十五年戦争」期の文学を通じて』三弥井書店、2012年。

13

胡風「序」『山靈—朝鮮台湾短篇小説集』文化生活出版社:上海(中国語)、1936年、1頁。本稿では下村作次郎による翻訳(下村作次郎『文学で読む台湾—支配者・言語・作家たち』田畑書店、1994年、18頁)を参照した。

14

同前。

の再定義をめぐる「国民文学」が議論される中で、植民地朝鮮の文学が「国民文学」の一部とみなされたものとして位置づけることができる¹¹。しかし、ここで重要なのは、日本文壇における植民地出身の「日本語作家」たちの作品は「国民文学」に一方的に包摂されるのではなく、様々なネットワークを生み出す可能性をはらんでいたという点である¹²。

例えば、中国の文学者・胡風は、張赫宙の日本語作品と、『文学評論』に掲載された朝鮮人作家(李北鳴、鄭遇尚)と台湾人作家(楊達、呂赫若)の日本語作品6篇を翻訳して『山靈—朝鮮台湾短篇小説集』(文化生活出版社:上海(中国語)、1936年)を出版した。「朝鮮語を解しないし、台湾についても材料を十分に手に入れていない」¹³胡風が、これらの日本語作品の翻訳を通じて「二つの地域の人民大衆の生活についてほとんど知るところがなかった」¹⁴中国の読者に、植民地下にある朝鮮と台湾の状況を伝えることになった。

このように、朝鮮文学を紹介し、読者のアジアへの関心・欲望を喚起した「帝国」のメディア¹⁵は、同時に様々なネットワークを生み出していた。

本稿では、植民地出身作家の作品を多く掲載していた『文芸首都』¹⁶に注目し、そこで行われた植民地出身作家同士の交流に光を当てることで、「帝国」のメディアで注目を浴びた「日本語作家」金史良の作品が、どのような批評空間の中で生成されたものであるのかを考察する。

保高德蔵主宰の文芸同人雑誌『文芸首都』については、多くの新人作家の習作期の作品を掲載し、彼らを世に送り出してきたことで知られている¹⁷。近年では、金史良の他に朝鮮人作家張赫宙(1905–1997年)・金達寿(筆名・金光淳¹⁸、1919–1997年)、台湾人作家龍瑛宗(1911–1999年)など、植民地出身作家の同人の作品が多く掲載されたことで、注目され始めてきた¹⁹。文芸同人雑誌という雑誌の性格から、『文芸首都』は「日本語作家」の習作期の発表媒体とみなされがちだが²⁰、1930年代から1940年代初めにかけて植民地出身作家の作品を掲載した『文芸首都』も、『文芸春秋』『改造』などの「帝国」のメディアと同様に、読者のアジアへの関心・欲望を喚起した点では「帝国」のメディアとして位置づけることができるだろう。

以下では、『文芸首都』巻末に掲載された各地の同人と読者の勉強会の記録、そして同人の間で交わされた書簡を手がかりに²¹、植民地出身作家たちが『文芸首都』においてどのような評価を受け、そして『文芸首都』を通じて植民地出身作家たちが交流するネットワークがどのように形成されたかを明らかにする。その上で、金史良作品をめぐる理解を問い直すことを試みたい。

2 植民地出身作家が『文芸首都』同人になった経緯

(1) 文芸同人雑誌『文芸首都』の性格

保高德蔵(1889–1971²²年)主宰の文芸同人雑誌『文芸首都』は、1933年1月に創刊され、1969年12月に終刊するまで36年間続いた²³。

『文芸首都』の創刊には、保高を含めた雑誌『改造』の懸賞創作の当選者が関わっていた。保高は早稲田大学在学時に小説の創作を始め、その後読売新聞社の婦人部記者・博文館『女学世界』編集部を経て、1919年より本格的な創作活動を始めた。その後、『改造』が創刊10周年を記念して募集を始めた第1回目の懸賞創作に「泥濘」が二等当選した(1928年5月号掲載)。

『改造』の編集者であった水島治男によると、当時作家としてデビューするためには「先輩・師匠に当たる作家から、出版社(編集者)に紹介してもらうか、大胆に自分で持ち込むか、同人雑誌に書いていて年季を入れているうちに、営業雑誌へスカウトされるか」²⁴しかなかったという。和泉司は、第3回『改造』懸賞創作に「ブルジョア」が一等当選し、後に様々な雑誌に作品を発表するようになった芹沢光治良ですら、懸賞創作でデビューしたため文壇から軽視されていたことを指摘し、「懸賞による〈文壇〉登場は、決して一般的な方途ではなかった」²⁵と述べている。

このような状況において、保高ら『改造』懸賞創作当選者が集まり²⁶、文壇の雑誌に作品を発表する機会が少ない後輩新進作家たちの作品発表の場を確保する目的で創刊されたのが『文学クオタリイ』である(1932年2月)。『文芸首都』が創刊されたのは、『文学クオタリイ』創刊の約1年後である(1933年1月)。この創刊号に『文学クオタリイ』の後援会が設けられたことの報告と、第3号の予告が掲載されたことから、保高は季刊誌と並行して月刊の『文芸首都』を創刊したと考えられる²⁷。ただし『文学クオタリイ』は2号で休刊し、『文芸首都』は1969年12月に終刊するまで36年間続くことになる。

『文芸首都』の特徴は、第一にこれまで作品を発表する場が少なかった作家に、発表の機会を与えたことである。「不遇なる新人に門戸を開放し才分ある新人の発見に努力し、純文芸の脈々たる生気を再び文壇に吹き送ることをもつて使命とする」²⁸と創刊号の巻頭言にあるように、『文芸首都』は『文学クオタリイ』と同様に新人作家の発掘を使命としていた。具体的には、『文芸首都』では創刊時より読者の作品の投稿を受け付けていた。同人の審査を通過した読者の作品は、『文芸首都』同人が作品を発表する創作欄(本欄)とは別に設けられた欄(「読者文芸」「新人文芸」)に掲載された²⁹。

第二に、「文芸首都友の会」などの読者の会を通じて、読者が同人や新人作家と交流する場が設けられたことである。1933年4月、『文芸首都』の読者の会の会員の募集が始まり、1933年7月以降には会員の集まりである「支部」が各地に設けられた。この会は、1934年3月に保高の博文館時代の同僚で黎明社社長の岩崎史郎に『文芸首都』の経営が託されてからも続いた。1936年11月に再び同人制になってからは、この読者の会は「文芸首都友の会」として再組織された。

『文芸首都』の経営は「同人制と文芸首都友の会、顧問の援助などに支えられた、保高独自の才覚と手腕に左右されていた」³⁰ことから、読者の会は経営の面からも必要とされたと考えられる。例えば、「友の会」の会員になるには「一ヶ月五拾銭宛半年分(全三円)を前納」³¹することが求められていた。

しかし、作家を志す読者にとっては、読者の会は「文学的向上」³²をもたらすもの

15

「帝国」のメディア」という表現は、これまで左派論壇・ジャーナリズムを牽引する出版社として知られてきた改造社をとらえ直した、高榮蘭「出版帝国の「戦争」—1930年前後の改造社と山本実彦「鮮・満」から」(『文学』第11巻第2号、2010年3・4月)と、米谷前掲論文にもとづいて用いる。高は、改造社社長・山本実彦の移動に光を当て、そこに植民地という「市場」、「民族」という新製品を形成する駆け引きが行われていたことを明らかにした。米谷は、このような山本の関心によって『改造』がアジア・大陸を語るメディアになっていったことについて「改造社は、戦間期から戦時期にかけて、「社会問題」やアジアを語るメディアの牽引役となり、アジア・大陸への関心・欲望を喚起する「帝国」のメディアになった」(米谷、前掲論文、185頁)とした。

16

2015年9月現在、『文芸首都』の復刻版は出版されていない。創刊号から終刊号までを所蔵するのは、日本近代文学館(東京・目黒区)のみである。本稿で取り扱う『文芸首都』は日本近代文学館に所蔵されているものであることを明記しておく。

17

『文芸首都』に発表された作品のうち、戦時期には半田義之「鶏騒動」(1939年6月)、芝木好子「青果の市」(1941年10月)が芥川賞を受賞した。また『文芸首都』は戦後には北杜夫、なだいなだ、佐藤愛子、中上健次らを世に送り出した。

18

金達寿が「金光淳」という筆名を使っていたことについては、金達寿「わが文学と生活」(青丘文化社、1998年、95-96頁)を参照。

19

『文芸首都』に朝鮮人作家と台湾人作家が同人として参加したことに注目した研究として、高柳俊男「保高德蔵 朝鮮人作家を育てた陸の文学者」(館野哲編『36人の日本人 韓国・朝鮮へのまなざし』明石書店、2005年)、王惠珍「龍瑛宗と『文芸首都』同人との交流」(『天理台湾学会年報』第12号、2003年6月)、王惠珍「帝國讀者對被殖民者文學的閱讀與想像:以同人雜誌《文藝首都》為例」(『台湾文学研究集刊』:台湾(中国語)、第11号、2012年2月)、金季好「1930年代の朝鮮文学者の日本語創作と雑誌『文芸首都』」(『日本文化研究』:韓国(韓国語)、第38号、2011年4月)などがある。

20

郭、前掲論文、198頁。郭は「文壇の外部」である『文芸首都』に発表された「光の中に」が、「文壇の内部」である『文芸春秋』に転載されたことで、「習作期」を経た金史良の「本格的な作家」としての活動が始まったと論じている。

21

本稿で『文芸首都』の同人・読者の勉強会と、同人の書簡に注目するに至ったのは、王惠珍「龍瑛宗と『文芸首都』同人との交流」(『天理台湾学会年報』第12号、2003年6月)に依拠する部分大きい。

22

保高德蔵の年譜については、保高みさ子「保高德蔵年譜」(『文芸首都総目次』文芸首都総目次編集会、1977年)を参照した。

23

『文芸首都』は1969年12月号(第38巻第12号)に掲載された保高の「ご挨拶」において終刊が告げられた。終刊号とは別に、1970年1月に『文芸首都 終刊記念号』が発刊され、同人たちの回想や「文芸首都略年表」が掲載された。

24

水島治男『改造社の時代 戦前編』図書出版社、1976年、49頁。

25

和泉司『日本統治期台湾と帝国の(文壇)―(文学懸賞)がつくる(日本語文学)』ひつじ書房、2012年、62頁。

26

『改造』懸賞創作当選者らは「改造友の会」を通じて交流していた。和泉は、芹沢光治良が「当選者が十人以上になった頃」(芹沢光治良『文学者の使命』主婦の友社、1973年、221頁)に「改造友の会」を結成したと回想していることから、結成の時期を1931年の第4回当選者発表以降としている(和泉、前掲書、70頁)。

27

『文学クオタライ』第2号(1932年6月)の編集後記では、「われわれは来る七月より『文学クオタライ月報』とも称すべき冊誌を刊行し、これを各位の御支持に酬ゆるの一端として洩れなく無代で呈上したいと思ふ。それには『文学クオタライ』に対する各位の感想、同人の小説文壇挿話並に読者諸氏の文芸作品、等等を掲載する予定」(514頁)と述べられている。保高みさ子は、この『文学クオタライ月報』を出す計画が『文芸首都』の創刊につながったのではないかと述べている(保高みさ子『花実の森―小説文芸首都』立風書房、1971年、64頁)。

28

「巻頭言」『文芸首都』1933年1月、2頁。

29

保高らの回想によると、投稿欄に採用された者の中で優れた者は本欄に作品が掲載されたり、同人として推薦されたという。後に、投稿欄に3回以上入選した者は本欄に作品が掲載されるという規定が定められた。「文芸首都新人育成座談会」『文芸首都』1943年11月、32頁。

だったといえる。「友の会」の会員になると「その投稿作品の添削批評を受けることが出来る」³³という特典があった。また、各地の支部は同人や読者を集めて毎月勉強会を開催していた。「本誌の愛読者は『文芸首都』を持参し挙つて参加して下さい」³⁴とあるように、この集まりには読者であれば誰でも参加することができた。勉強会の記録は、参加者リストと共に翌月の『文芸首都』の巻末に掲載された。その記録を見てみると、勉強会では、『文芸首都』に掲載された作品(本欄・投稿欄)や、読者達自身の創作をめぐり議論が展開されたことを確認できる。当初は大阪・神戸・長崎の支部において「例会」という名称で始められたこの勉強会は、その後「支部座談会」「読者会」と名前を変えながら続いていった。金史良が『文芸首都』に参加した時期には、東京・大阪・神戸・京都・九州・淡路・名古屋・金沢・姫路・横須賀³⁵など、様々な地域の支部において開催されていた³⁶。

(2)『文芸首都』における植民地出身作家の作品の掲載

このように、『文芸首都』は同人制によってこれまで発表の機会が少なかった作家に発表の場を与えると共に、投稿欄や読者の会、各地の支部による勉強会を通じて、様々な地域における新人作家の発掘を行っていた。植民地出身作家の作品が『文芸首都』に多く掲載されたこと³⁷は、『文芸首都』のこのような性格と深く関わっている。以下では、『文芸首都』において植民地出身作家の作品が掲載された経緯を明らかにする。

【表】『文芸首都』に掲載された植民地出身作家の著作(1933~1942年)
同人以外の人物は*を付けて区別した。

掲載号	作家名	掲載欄	種類	題名
第1巻第1号(1933.1)	張赫宙	本欄	隨筆	「僕の文学」
第1巻第2号(1933.2)	張赫宙	本欄	隨筆	「特殊の立場」
第1巻第5号(1933.5)	張赫宙	本欄	小説	「兄の脚を載る男」
第1巻第9号(1933.9)	張赫宙	本欄	小説	「奮ひ起つ者」
	張赫宙	本欄	評論	「文芸時評 優秀より巨大へ」
第1巻第10号(1933.10)	張赫宙	本欄	評論	「文芸時評 翻訳の問題・其の他」
第1巻第12号(1933.12)	張赫宙	本欄	隨筆	「作家の一日 秋日抄」
第2巻第1号(1934.1)	張赫宙	本欄	小説	「女房」
第2巻第5号(1934.5)	張赫宙	本欄	小説	「山犬(ヌクテ)」
第2巻第10号(1934.10)	張赫宙	本欄	評論	「素朴と非素朴」
	* H.N.K(許南麒)	投稿欄	詩	「朝」
第2巻第12号(1934.12)	* N.N.K	投稿欄	俳句	「アリランのきこゆる船や秋の風」
	* 崔東一	投稿欄	小品	「少年達」
第3巻第3号(1935.3)	* H.N.K(許南麒)	投稿欄	俳句	「逝く春の煙上れり山の小屋」
	張赫宙	本欄	小説	「あらしむ」
第3巻第5号(1935.5)	* 崔東一	投稿欄	詩	「希望」
	* 崔東一	投稿欄	小品	「帰村記」
第3巻第6号(1935.6)	* 崔東一	投稿欄	小品	「ある感覚」
第3巻第8号(1935.8)	張赫宙	本欄	隨筆	「ある感覚」
第3巻第10号(1935.10)	* 崔東一	投稿欄	小品	「喜劇」
	* 崔東一	投稿欄	詩	「山の詩」
第3巻第11号(1935.11)	* H.N.K(許南麒)	投稿欄	詩	「秋風景」
第3巻第12号(1935.12)	* H.N.K(許南麒)	投稿欄	詩	「廢園の唄」

掲載号	作家名	掲載欄	種類	題名
第4巻第1号(1936.1)	* H.N.K(許南麒)	投稿欄	詩	「列車」
第4巻第3号(1936.3)	張赫宙	本欄	小説	「狂女点描」
	* H.N.K(許南麒)	投稿欄	詩	「移民列車」
第4巻第10号(1936.11)	張赫宙	本欄	小説	「或る時期の女性」
	張赫宙	本欄	座談会	「明治大正の文学運動座談会」
第4巻第11号(1936.12)	張赫宙	本欄	隨筆	「北条民雄氏のこと」
	張赫宙	本欄	隨筆	「我が散策」
第5巻第1号(1937.1)	張赫宙	本欄	座談会	「大正時代の文学運動座談会」
	張赫宙	本欄	隨筆	「お正月」
第5巻第2号(1937.2)	張赫宙	本欄	隨筆	「私の一番言ひ度いこと」
	張赫宙	本欄	隨筆	「作家日誌 日記」
第5巻第3号(1937.3)	張赫宙	本欄	隨筆	「東京の鴉」
	龍瑛宗	本欄	隨筆	「東京の鴉」
第5巻第8号(1937.8)	* 楊遠	本欄	評論	「『第三代』その他」
	* 孫東村	投稿欄	小説	「草堂」
第5巻第10号(1937.11)	張赫宙	本欄	隨筆	「満洲移民に就いて」
第6巻第3号(1938.3)	張赫宙	本欄	隨筆	「春香伝について」
第6巻第6号(1938.6)	* 青木洪(洪鐘羽)	本欄	小説	「東京の片隅で」
第7巻第1号(1939.1)	龍瑛宗	本欄	隨筆	「わが秋風帳」
第7巻第2号(1939.2)	張赫宙	本欄	評論	「ブツク・レヴエウ」
第7巻第6号(1939.6)	金史良	本欄	評論	「朝鮮文学風月録」
第7巻第9号(1939.9)	金史良	本欄	隨筆	「エナメル靴の捕虜」
第7巻第10号(1939.10)	金史良	本欄	小説	「光の中に」
第7巻第11号(1939.11)	* 李石薫	本欄	隨筆	「交通事故」
第8巻第2号(1940.2)	金史良	本欄	小説	「土城廊」
第8巻第3号(1940.3-4)	金史良	本欄	書簡	「母への手紙」
第8巻第5号(1940.6)	金史良	本欄	小説	「箕子林」
第8巻第6号(1940.7)	龍瑛宗	本欄	小説	「宵月」
第8巻第7号(1940.8)	金史良	本欄	隨筆	「玄海灘密航」
第8巻第9号(1940.10-11)	金史良	本欄	書簡	「平壤より」
第8巻第10号(1940.12)	龍瑛宗	本欄	評論	「二つの『狂人日記』」
第9巻第1号(1941.1)	龍瑛宗	本欄	隨筆	「同人日記」
第9巻第2号(1941.3)	金史良	本欄	紀行	「メンドレミの花」
	金史良	本欄	紀行	「部落民と薪の城」
第9巻第3号(1941.4)	龍瑛宗	本欄	隨筆	「熱帯の椅子」
第9巻第4号(1941.5)	金史良	本欄	紀行	「村の酌婦たち」
第9巻第6号(1941.7)	金史良	本欄	隨筆	「山の神々」
第10巻第2号(1942.3)	金光淳(金達寿)	本欄	小説	「塵」
	張赫宙	本欄	隨筆	「その頃の思い出」
第10巻第5号(1942.4)	金光淳(金達寿)	本欄	隨筆	「大越鍊一君」
第10巻第9号(1942.10)	金光淳(金達寿)	本欄	隨筆	「無駄に就て」

まず、『文芸首都』にどのような植民地出身作家の作品が掲載されたかを見てみたい。この表は、戦前に『文芸首都』に掲載された植民地出身作家の著作を筆者がまとめたものである。この表からは、『文学クオタリイ』から参加していた張赫宙をはじめ、徐々に植民地出身の同人(龍瑛宗・金史良・金達寿)の作品が掲載されていくようになったことを確認できる。また、同人の他に台湾人作家の楊遠、朝鮮人作家の青木洪(洪鐘羽)³⁸、李石薫らの作品も見られる。投稿欄には、崔東一と孫東村³⁹、そして朝鮮で『文芸首都』を読み、H・N・K⁴⁰という筆名で詩と俳句を投稿していた

30

『日本近代文学大事典 第5巻新聞・雑誌』講談社、1977年、380頁。

31

「『文芸首都』友の会会員を募る」『文芸首都』1936年11月、129頁。

32

『編集後記』『文芸首都』1936年11月、208頁。

33

「『文芸首都』友の会会員を募る」『文芸首都』1936年11月、129頁。

34

「編輯だより」『文芸首都』1937年3月、199頁。

35

横須賀支部は1942年7月に発足し、金達寿が参加していた。

36

支部は朝鮮にも設けられた。1938年1月号では朝鮮興南支部の結成が、1943年6月号では平壤支部の発足が報告された。興南支部の読者会の記録は、誌面に掲載されていない。

37

白川豊「植民地期朝鮮の作家と日本」(大学教育出版、1995年)所収の「日本雑誌に発表された旧植民地作家の文学」を参照。

38

青木洪の本名が洪鐘羽であることは、青木洪「耕す人々の群」(第一書房、1941年)の「序」を参照。そこでは、青木の文通相手だった細田民樹が「朝鮮の清津から、洪鐘羽といふ一青年労働者の長い手紙をうけとつた」(1頁)と述べている。

39

崔東一は1936年から1937年にかけて、文学同人誌『麴麴』に作品を残しており、これらの作品は、大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集(1901~1938)』(緑蔭書房、2004年)の創作篇4・5巻に収録されている。また、孫東村が『文芸首都』に投稿した作品も「創作篇5」に収録されている。しかし、「創作篇5」に収録された「解説」では、崔東一と孫東村は「生没年不詳」とされており、これ以外の創作活動については不明である。

40

許南麒が『文芸首都』に詩を投稿していたことについては、孫志遠「鶏は鳴かすにはいられない—許南麒物語」(朝鮮青年社、1993年、16-17頁)を参照。さらに、許南麒が俳句も投稿していたことが、王惠珍「帝國讀者對被殖民者文學的閱讀與想像：以同人雜誌《文藝首都》為例」(『台湾文学研究集刊』：台湾(中国語)、第11号、2012年2月、29頁)で指摘された。また、『文芸首都』1934年12月号に「朝鮮 N・N・K」という人物の俳句が見られるが、これは「H・N・K」の誤植ではないかと考えられる。

41

張赫宙が山本実彦に『改造』懸賞創作当選者の会合に招待されて「改造友の会」のメンバーである保高と知り合った経緯や、保高の元で寄宿した経緯については、保高德蔵『作家と文壇』（講談社、1962年、164-166頁）を参照。

42

金達寿は当時、大越鍊一・二瓶愛蔵らの同人誌『蒼猿』に加わっていた。1940年から1941年にかけて、用紙規格が統制され同人雑誌の整理統合が行われると、『蒼猿』は井野川潔・島秋夫らの「山脈」などととも、『文芸首都』に統合されることになった。金達寿、前掲書、87頁。

43

王惠珍「龍瑛宗の『改造』第九回懸賞創作佳作受賞訪日旅行覚え書」『現代台湾研究』第24号、2003年3月。

44

以下、本稿で扱う龍瑛宗宛ての書簡の一部は、王惠珍「戦鼓聲中的殖民地書寫：作家龍瑛宗的文學軌跡」（台大出版中心：台湾（中国語）、2014年）に原文が影印本で収録されている。同書に未収録の書簡については、王惠珍氏から提供していただいたものを使用する。

45

1937年6月15日付、張赫宙の龍瑛宗宛ての書簡（王惠珍、前掲書、436頁）。

46

龍瑛宗「芥川賞の「鷄騒動」—「文芸首都」と保高さん」『台湾新民報』1939年8月。本稿では『龍瑛宗全集[4]評論集』（国立台湾文学館：台湾、2008年、10-11頁）に収録された影印本を参照した。

47

支部幹事「東京支部座談会」『文芸首都』1937年8月、190頁。

48

1940年1月9日付、保高德蔵の龍瑛宗宛ての書簡（王惠珍、前掲書、437頁）。

49

金史良が沢開進の仲介で張赫宙と知り合ったことについては、沢開進と張赫宙の両者の回想（沢開進「金史良の学生時代」『図書』第272号、1972年4月、野口赫宙（張赫宙）「金史良の名付け親」『土地とふるさとの文学全集月報③』家の光協会、1976年11月）を参照。

50

野口赫宙、前掲文、4頁。

51

同前。

詩人許南麒の作品が掲載された。この表は、『文芸首都』に掲載された植民地出身作家の作品をめぐっては、いずれの時期においてもそのほとんどが同人の作品であったことをあらわしている。

それでは、張赫宙・金史良・龍瑛宗・金達寿は、どのような経緯で同人になったのだろうか。これまで、保高が植民地出身作家たちを『文芸首都』の同人として積極的に受け入れたことについては、石油輸入商の父と共に朝鮮で暮らした保高の植民地経験によるものと理解されてきた。しかし、植民地出身作家たちは保高の植民地への関心によって一方的に受け入れられたわけではなかった。彼らが同人になった経緯には、『改造』懸賞創作当選者のネットワーク（「改造友の会」）や張赫宙が関与していた。

張赫宙が同人になった経緯には、「改造友の会」が深く関わっていた。張赫宙は、第五回『改造』懸賞創作に「餓鬼道」が入選（1932年4月号掲載）し、来日した際に山本実彦に『改造』懸賞創作当選者の会合に招待され、保高ら「改造友の会」の人々と知り合う。その後張は、保高のもとで寄宿しながら親交を深め⁴¹、『文学クオタリイ』『文芸首都』に同人として参加した。

張赫宙に続いて同人になったのは金史良・龍瑛宗・金達寿である。金達寿は参加していた同人誌が用紙規格の統制によって『文芸首都』に統合されて同人になった⁴²。ここで、龍瑛宗と金史良は張赫宙の仲介によって保高と知り合ったことに注目したい。

龍瑛宗は「パイヤのある街」が第九回『改造』懸賞創作に入選（1937年4月号掲載）し、受賞の機会に初来日する。「改造友の会」の会合などに出席し、日本文壇の文学者達と知り合った龍は、その後日本の雑誌に発表の機会を持った⁴³。

龍瑛宗は、来日前の1937年6月上旬から中旬にかけて、張赫宙と手紙のやり取りをしていた。現在、張赫宙が龍瑛宗に宛てた書簡（1937年6月15日付）が残っている⁴⁴。手紙の中で張は「保高德蔵（芝区巴町一）と湯浅克衛（芝区愛宕町、第二愛山荘）の両氏に是非逢って下さい。吾々植民地人には特に理解が深いですから」⁴⁵と、龍に保高に会うように勧めている。実際に龍は来日した際に保高の自宅を訪ねており⁴⁶、『文芸首都』の「東京支部座談会」（東京支部の同人と読者の勉強会）に出席したことが記録に残っている⁴⁷。

さらに、保高が龍瑛宗に同人になることを勧めたことを、保高の書簡から読み取ることができる。龍瑛宗が日本滞在を終えて台湾に戻ってからも、二人は手紙のやり取りを続けていた。保高は1940年1月9日付の龍瑛宗への書簡で「差し支えがなければ、文芸首都の同人に参加してくれませんか。今日では、飽和状態になり、他からの人は謝絶してりますが、龍さんでしたら、喜んでお迎えます」⁴⁸と、龍が同人として参加することを歓迎している。

金史良が張赫宙と知り合った経緯には、金史良のドイツ文学科の同級生で、『堤防』の同人だった沢開進が関わっていた⁴⁹。『帝国大学新聞』の編集に参加していた沢開は、張赫宙のもとに「時折り原稿を頼みにやってきた」⁵⁰。張赫宙は「そんなある日、澤開君に同伴されてきたのが金史良で、それが彼との初対面である」⁵¹と、金史良

との出会いを回想している。その後金史良は、張赫宙が村山知義と共に行った「春
香伝」の朝鮮上演(1938年8月)を手伝っており、この上演活動などを通じて金史良
と張赫宙は親交を深めていったと考えられる。

保高は、金史良が大学を「卒業した年(1939年)の春、張赫宙君の紹介状をもつて
私を訪ねてくれた」⁵²と回想している。このことから、金史良も龍瑛宗と同じように、
張赫宙から『文芸首都』主宰の保高に会うことを勧められたと考えられる。『文芸首都』
誌上では、金史良がいつ同人になったかを確認することはできないが⁵³、1939年の
時点で本欄に作品や評論を発表していたことから、1939年には同人として活動して
いたと考えられる。

さらに、当時大学の同人雑誌にしか作品を発表したことがなかった金史良が初め
て発表した作品「光の中に」が、『文芸首都』の投稿欄ではなく「本欄」に掲載された
経緯にも、張赫宙が関わっていた。「保高さんは「君が推薦するなら無条件に受けつ
ける」といい、[金史良の]処女作をのせてくれた」⁵⁴という張赫宙の回想から、「光
の中に」が「本欄」に掲載されたことをめぐっては、張赫宙の後押しがあったことを
垣間見ることができる。

張赫宙に仲介されて保高と知り合った龍瑛宗と金史良は、新人作家を発掘する
使命を持つ『文芸首都』の性格と保高の植民地への関心が重なりあうことで、同人
として迎え入れられた。このように、同人や新人に作品の発表の場を提供した『文
芸首都』は、同時に植民地出身作家の作品発表の場になっていった。

52

保高德蔵「純粋な金君」『新日本文学』第7巻
第12号、1952年12月、60頁。

53

『文芸首都』の同人のリストは不定期に掲載
された。1941年1月号の奥付に掲載された「文
芸首都編集同人」には金史良と龍瑛宗の名前
を確認することができる。

54

野口赫宙、前掲文、5頁。

3 金史良作品をめぐる読者会での反応

それでは、『文芸首都』の同人や読者たちは、金史良の作品をどのようにとらえてい
たのだろうか。上述したように『文芸首都』の各地の支部による勉強会(以下「読者会」
とする⁵⁵)の記録は、『文芸首都』の巻末に毎号掲載されていた。以下では、この読者
会の記録を手がかりに、金史良が発表した作品をめぐる同人と読者の評を見ていく。

まず、金史良が初めて『文芸首都』に発表した小説で、第10回芥川賞候補作になっ
た「光の中に」をめぐる評を見てみたい。

「光の中に」には、「帝大生が中心となつてある一つの隣保事業の団体」⁵⁶である「S
協会」⁵⁷で英語を教えている東京帝大の学生・南と、少年・山田春雄の交流を通じて、
二人が抱える問題(周りに「南」^{みなみ}と名乗ること・朝鮮人の母親を隠すこと)が描かれる。

芥川賞の「経緯」を見てみると、多くの選考委員は「光の中に」を「民族神経」⁵⁸「民
族の感情の大きい問題」⁵⁹「民族の悲痛な運命」⁶⁰を扱った作品として高く評価して
いた。よって、日本文壇において金史良は、朝鮮人の帝国日本への同化とその葛藤
を描くことを期待されていたといえる。

このような期待は、『文芸首都』の同人・読者の評にも共通している。「光の中に」
は作品における技術的な未熟さは指摘されながらも、どの地域の読者会でも好評
だった。金史良も出席した東京読者会では「素晴らしく好評である。落ち着いた潤ひの

55

各地の支部による勉強会の名称は、金史良
らの作品が掲載された時期には「読者会」と
いう名称だったため、以下では読者会とする。

56

金史良「光の中に」『文芸首都』1939年10月、
7頁。

57

「〈S大学協会〉は「東京帝国大学セツルメント」
を指すと思われる」(任展慧「解題」『金史良
全集』河出書房新社、1973年、376頁)。

58

瀧井孝作「芥川龍之介賞経緯」『文芸春秋』
1940年3月、348頁。

59

川端康成「芥川龍之介賞経緯」『文芸春秋』
1940年3月、351頁。

60

佐藤春夫「芥川龍之介賞経緯」『文芸春秋』
1940年3月、352頁。

- 61
N・K(勝田波雄)「東京読者会」『文芸首都』1939年11月、170頁。
- 62
大沢肇「京都読者会」『文芸首都』1939年11月、172頁。
- 63
瀧口新二「神戸読者会」『文芸首都』1939年11月、172頁。
- 64
「土城廊」(『文芸首都』1940年2月)は「堤防」(1936年10月)に発表したものを改作して発表したものである。
- 65
K(本名不明)「東京読者会」『文芸首都』1940年3・4月合併号、184-185頁。
- 66
玉井広文「城西読者会」『文芸首都』1940年7月、191頁。
- 67
K(北川俗)「神戸読者会」『文芸首都』1940年7月、189頁。
- 68
K(日下部新)「京都読者会」『文芸首都』1940年7月、189頁。
- 69
若杉恵「神戸読者会」『文芸首都』1940年3・4月合併号、186-187頁。

ある文章で永遠の問題とも思はれる民族感情を扱って悠々迫らず、愛こそ絶対なりと述べ去り述べ来る卓抜なる技法、首都近來の傑作なり」⁶¹と評された。「光の中に」は、他の読者会においても「我々が識り得なかつた未知数の世界を、刻明に描いて呉れた」⁶²作品として、「一様に好感を以て迎へられた」⁶³。

また、金史良が『文芸首都』に発表した他の作品をめぐる同人・読者の評においても、金史良に対する期待を見ることができる。以下、金史良が発表した二作品「土城廊」(1940年2月)⁶⁴、「箕子林」(1940年6月)をめぐる評を見ていく。

これらの二作品においては、植民地支配を経た朝鮮で小作農が没落し都市周辺部の集落「土幕」が形成されたこと(「土城廊」、小作農が山で焼畑農業を行う「火田民」になったこと(「箕子林」)を背景に、貧困にあえぐ人びとが描かれた。

二作品は「光の中に」が各地の読者会で好評だったのに対し、評判があまりよくなかった。例えば「土城廊」は「退屈で読み切れないといふ人もゐた。さう言はれて見ると、たしかにゴタゴタしてゐて、印象のすつきりと通らない」⁶⁵と、作品のわかりにくさが指摘された。「箕子林」についても「先ず総体に、作者独りが解つてゐる為にさうなつたのだらうと思はれる説明不足の為に、読んでゐて極めて飲み込みにくい」⁶⁶と評された。

二作品をめぐる評で注目すべきなのは、「土城廊」と「箕子林」が「光の中に」とは作風が異なるものとして読まれた点である。具体的には、二作品は「半島風俗の紹介に移つた」⁶⁷と朝鮮内の問題を描いたものとされ、また「光の中に」とは違い「ロマンチズムを背後に密めた物語的な作品」⁶⁸と読まれもした。その上で、「金氏が「光の中に」で示したやうな態度で、さういふものが書いて欲しいと誰しも望むところであるらしかつた」⁶⁹という読者会の記録からは、『文芸首都』の同人と読者が金史良に対し、「土城廊」「箕子林」ではなく「光の中に」のような作品を期待していたことを垣間見ることができる。

このように、読者会において「光の中に」が好評だったのに対し、「土城廊」「箕子林」は不評だった。これは、当時金史良を受け入れた日本文壇と同様に、『文芸首都』の同人と読者も、朝鮮人作家・金史良に対し朝鮮人の帝国日本への同化とその葛藤を描くことを期待していたことをあらわしている。

4 植民地出身作家の作品が生成された批評空間—書簡を手がかりに

しかし、植民地出身作家の作品は『文芸首都』の同人や読者によって一方的に評されるだけではなかつた。『文芸首都』の同人と読者の批評の場は、同時に植民地出身作家同士の交流を生み出した。以下では、読者会の記録と併せて、同人の間で交わされた書簡を見ることで、植民地出身作家の作品が生成された批評空間を明らかにしたい。

まず、金史良と龍瑛宗が『文芸首都』を通じて出会い、手紙を交わしたことに注目する。

金史良と龍瑛宗は直接の面識はなかった。台湾で銀行員をしながら創作していた龍瑛宗は、日本で創作をしていなかったため、他の作家と会う機会が少なかったと考えられる。保高德蔵が1941年1月21日付で龍瑛宗に送った葉書を見ると、金史良の添え書きを確認することができる。保高は同人費を受け取ったことの報告と、随筆の依頼をするために、龍瑛宗に葉書を送った。「金史良君が来てみますから、一筆書いてもらいます」⁷⁰という文章の後に、金史良の添え書きが続く。金史良が「まだ一度もお目にかかったことはないけれど、何故かしら大変親しみを感じてみます」⁷¹と書いていることから、龍瑛宗への関心を持っていたことを垣間見ることができる。

現在、金史良が1941年2月8日付で龍瑛宗に宛てた手紙が残っている⁷²。龍瑛宗が金史良に宛てた手紙は残っていないが、手紙に「今朝御手紙有難く拝受致しました」とあることから、この手紙は龍瑛宗の手紙への返事であることが判明する。上述した保高の葉書と日付が近いことから、二人は金史良が保高の葉書に添え書きを書いたことをきっかけに、手紙のやり取りをするようになったと考えられる。

手紙の前半では、台湾の文学者をめぐる金史良の質問などが書かれている。そして「兄なども文学の上でいろいろお悩みのことと思ひます」「やはり貴兄は台湾人の文学をやつてゐるし、又やるべきだし、僕は朝鮮人の文学をやつてゐるし、またやるべきだと思ふ」などの文章から後半にかけては、龍瑛宗が『文芸首都』に発表した「宵月」(『文芸首都』1940年7月)をめぐる金史良の評価と、「光の中に」をめぐる龍瑛宗の批評に対する応答が行われている。そこに「台湾人の文学」をやっている龍瑛宗と、「朝鮮人の文学」をやっている金史良の「悩み」の共有を確認することができる。

それでは二人が共有した「悩み」とはどのようなものか。ここで、龍瑛宗の「宵月」をめぐる読者会の記録を見てみたい。龍瑛宗の「宵月」には、主人公とかつての友人の再会が描かれる。台湾の公学校の代用教員をしている友人は、中学校では有名な秀才だった。しかし、現在は酒に溺れ、最終的には病気になる妻と四人の子どもを残して死んでしまう。このように「宵月」ではこの主人公の友人が落ちぶれていく様子が描かれる。

「宵月」をめぐる読者会の記録を見てみると、各地の読者会で共通しているのは、主人公の友人の描かれ方をめぐる批判である。城西読者会では「主人公が、その友人の死に付いて懐く感傷が述べられてゐるのだが、これが散漫で、文学的な統一を欠きはすまいか」⁷³とされ、東京読者会では「友人の悲惨な死を描くにしては、作者は余りに詩の中に逃避して、現実に直面しない」⁷⁴と評された。

「宵月」をめぐる批判に対し、東京読者会に出席していた金史良は「相当な才能を有しながら、酒に身を持ち崩した主人公を現実的に描くには、台湾本島人といふ作者の立場からでは、現下の状況では出来ないのではないか」⁷⁵と発言した。さらに、金史良は上述した手紙の中で「宵月」について「僕は非常に身近なものを感じました。やはり貴兄のところも僕のところも現実的には変はらないやうで慄然としましたよ。あの作品は勿論現実暴露のものでなく、極めて当り前風に書かうとなさつた作品です。だが僕はその中に貴兄のふるへてゐる手をみたやうです」と評している。

70

1941年1月21日付、保高德蔵の龍瑛宗宛ての葉書(王惠珍氏提供)。

71

同前。

72

1941年2月8日付、金史良の龍瑛宗宛ての書簡。同書簡は、下村作次郎『文学で読む台湾 支配者・言語・作家たち』(田畑書店、1994年)に全文引用されており(210-212頁)、大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集(1908~1945)セレクション6』(緑蔭書房、2008年)には原本が影印本で収録されている。手紙の日付は2月8日としか記されていないが、下村作次郎は、手紙の中で金史良「光の中に」と龍瑛宗「宵月」が言及されていることから、これらの作品が発表された後(1941年2月8日)にこの手紙が書かれたと説明している(下村、前掲書、212頁)。

73

玉井広文「城西読者会」『文芸首都』1940年8月、181頁。

74

新長雄逸「東京読者会」『文芸首都』1940年8月、178頁。

75

同前。

このように金史良は、読者会で「現実に直面しない」と評された「宵月」から、「非常に身近なもの」「〔龍瑛宗の〕ふるへてゐる手」を読み取った。「宵月」において主人公の友人が日本人である校長に対し給料が安いと不満を吐露する部分から考えると、金史良は「宵月」の主人公の友人の貧困や死の背景にある、日本人教員と台湾人教員の格差などの植民地の現実を「身近なもの」としてとらえたのではないかと。

その上で自身の「光の中に」については「兄のご批評尤もだと思ひます。僕もいつの日かその作品の改訂し得る時が来ることを心から待つてゐるのです。好きな作品ではありません。やはり内地人向きです。僕もはつきり分つてゐます」と述べている。日本文壇で高く評価された「光の中に」を「内地人向き」と表現することは、「光の中に」をめぐる読者会や日本文壇の評価に対する金史良の違和感をあらわしている。

手紙を通じて互いの作品を批評した金史良と龍瑛宗の交流からは、植民地出身作家にとって「身近なもの」が、『芸芸首都』同人・読者や日本文壇においてズレをもって解釈される可能性があるという、植民地出身作家の「悩み」の共有を読み取ることができる。

さらに、植民地出身作家に共有される問題が、植民地出身作家同士の出会いによって作品になっていった過程を、金史良と金達寿の交流から読み取ることができる。

1941年11月、金達寿が参加していた『蒼猿』が『芸芸首都』に統合された後に設けられた同人の集まりで、金史良と金達寿は出会い、その後手紙を交わすようになる。

金達寿は、以前から金史良のことを知っていた。金達寿は10歳の時(1930年)に日本に渡り、紙や金物を買集め売買する屑屋の仕事をしながら、屑に紛れた小説を読んで勉強し、日本大学専門部芸術科に入学する(1939年)⁷⁶。その後、金達寿は大学の芸芸誌などに作品を発表し始める⁷⁷。金達寿の回想によると、1939年から1940年にかけて、金達寿は『モダン日本 朝鮮版』に掲載された朝鮮人作家の作品や、金史良の「光の中に」を読んだという⁷⁸。金達寿はこれらの作品を読んで「はじめて朝鮮というものに対して目を開かれた。いわば日本の言葉を通じて朝鮮に目覚めた」⁷⁹と述べている。

金達寿は、同人会で金史良に会った後に「思い切ってその彼にかなり長い手紙を書いた」⁸⁰という。その後、二人は数回手紙を交わすことになる。現在、金史良が金達寿に宛てた葉書が4枚残っている⁸¹。その中から、横須賀で協和会主催の朝鮮人移住労働者たちの運動会⁸²を見に行くことの連絡のために出されたもの(1941年11月15・19日付)、そしてその運動会の感想を伝えるもの(1941年11月28日付)を見ていきたい。

これらの葉書の中で、金史良は「いつかお暇の時横須賀の「奇怪」ぶりを見に参りたいものです」(1941年11月15日付)、「この蟲を案内して下さいませ。運動会がみれるのは実に嬉しいです」(1941年11月19日付)、「横須賀は私のメヂナです」(1941年11月28日付)と述べている。

金史良は、芝浦海岸の朝鮮人移住労働者の生活を描いた小説「蟲」(『新潮』1941年7月)を発表していた。二人の手紙のやり取りの中では、この作品に登場する言葉(「蟲」「メヂナ」)が暗号のように用いられている。これは「蟲」で描かれたような朝鮮

76

金達寿の年譜は、金達寿による最後の自筆年表が含まれた、崔孝先『海峡に立つ人 金達寿の文学と生涯』(批評社、1998年)所収の「金達寿年譜」を参照した。

77

金達寿、前掲書、80-86頁。金達寿は大学で学ぶ中で同人誌『新生作家』を創刊し、また大学の芸芸委員長として雑誌『芸術科』の編集に関わっていた。金達寿が最初に発表した作品「位置」は『芸術科』(1940年8月)に掲載された。

78

金達寿「金史良と私」『朝鮮人』第24号、1986年6月、金達寿「わが文学と生活」青丘文化社、1998年。

79

金達寿「金史良と私」『朝鮮人』第24号、1986年6月、37頁。

80

金達寿「金史良の手紙」『学之光』第8号、1963年7月、36頁。

81

金史良が金達寿に宛てた葉書は『金史良全集IV』(河出書房新社、1973年)に全文が収録されている。現在これらの葉書は、神奈川近代文学館に所蔵されている。全集に収録されたものと葉書の原本を照らし合わせてみた結果、若干の仮名遣い・句読点の差異が見られたため、本稿では葉書の原本を参照する。

82

金達寿「金史良と私」『朝鮮人』第24号、1986年6月、41頁。

人移住労働者が横須賀にも存在していることへの、金史良の興味をあらわしているといえる。

二人は日本語の雑誌メディアを通じて出会い、交流する中で朝鮮人移住労働者の生活を描いた作品をそれぞれ発表する。金史良は、横須賀の朝鮮人移住労働者の運動会を見学したことにもとづいて執筆したと考えられる「親方コブセ」(『新潮』1942年1月)を発表した。そして、金史良に「兄こそ、あの生活感情、ひいてはわれらの生活感情を立派な小説にして書いて下さい」(1941年11月28日付)と言われた金達寿も、日本で屑屋として働く主人公を描いた小説「塵」を『文芸首都』(1942年3月)に発表した。

これらの作品では「光の中に」と同様に日本に居住する朝鮮人が描かれているが、そこには「光の中に」にあるような朝鮮人の同化をめぐる葛藤については見られない。むしろ、日本社会における朝鮮人移住労働者のコミュニティを描いたこれらの作品には、日本社会における同化不可能なものとしての朝鮮人が描かれているといえる。

5 おわりに

以上のように、保高德蔵主宰の『文芸首都』は、新人作家を発掘するという雑誌の性格と、保高の植民地への関心や張赫宙の関与が重なりあうことで、植民地出身作家の作品発表の場になった。各地の支部による勉強会の記録からは、植民地出身作家に対する作品の内容に対する期待が見られた。しかし、植民地出身作家は一方的に『文芸首都』の同人・読者に評されるだけではなかった。『文芸首都』の同人になることを通じて、金史良と龍瑛宗、金史良と金達寿の間に個人的なやり取りが生み出された。そこでは、自らの作品が日本文壇や『文芸首都』の同人・読者から受ける評価への違和感が「悩み」として共有され、さらに植民地出身作家の間で共有された問題関心が作品になっていく過程が見られた。

このような『文芸首都』を通じた植民地出身作家の交流からは、「帝国」のメディアにおいて、「国民文学」に包摂されきれない植民地出身作家同士のネットワークが形成されたと考えることができる。それでは、このような植民地出身作家同士が交流するネットワークをふまえると、金史良作品をどのようにとらえ直すことができるだろうか。

植民地期における朝鮮人の日本語創作をめぐるのは、一方的に主体性を喪失したものとして論じられてきたといえる⁸³。金史良は日本語で創作していたが、「光の中に」に朝鮮人の日本社会への同化をめぐる葛藤が批判的に描かれたことや、解放直前に中国の抗日地域に脱出したことから、一般的に「民族主義作家」⁸⁴とされてきた。しかし、「光の中に」以降に発表された作品については、民族主義作家からの「後退」と理解された。安宇植は、「光の中に」を「朝鮮人作家としての彼の民族的良心、さらには、彼に負わされた民族的責任」⁸⁵が高まったものとして評価する一方で、金史良が1941年以降に発表した作品については「「あいまいさ」、そして「弱いもの」

83

林鍾国『親日文学論』平和出版社：韓国(韓国語)、1966年。日本語版は、林鍾国著・大村益夫訳『親日文学論』高麗書林、1976年。

84

安宇植『評伝 金史良』草風館、1983年。

85

安宇植、前掲書、90頁。

への後退をよぎなくされた」⁸⁶と、民族的良心や民族的責任が「後退」したものとした。

「光の中に」で注目を浴びた金史良は、その後火田民や朝鮮人移住労働者など、様々な題材を扱うようになる。しかし、本稿で明らかにした『文芸首都』を通じて形成された植民地出身作家のネットワークをふまえると、金史良作品をめぐる題材の変化は、『文芸首都』での活動や、そこで植民地出身作家と出会ったことを通じて生じたものであると考えられるため、単純に民族主義作家の「後退」とすることはできない。このように、金史良作品の題材の変化を、「帝国」のメディアの中で批評される中で試行錯誤を行った形跡としてとらえ直すことは、金史良作品をめぐる新たな読みの可能性を開くことになるといえるだろう。

付記

本稿は日本近代文学会2013年度12月例会「国際研究集会—日本近代文学のインターフェイス」のパネル「植民地／帝国の文学のネットワーク—日本語作家」張赫宙・金史良の再検討を通じて」における発表にもとづいている。

本稿を準備する過程で、台湾・国立清華大学の王惠珍氏から龍瑛宗宛ての書簡を提供していただいた。この場を借りて深く御礼申し上げる。